

5115

特 1

363

祝  
ひ  
歌

若松 賤子 譯

發光

盤谷社書店

100829-000-7

特10-363

いわひ歌

若松 賤子 / 訳

M27

DBY-0073





5115 特 10

363

若松賤子譯

祝  
以  
教

發兌  
警醒社書店

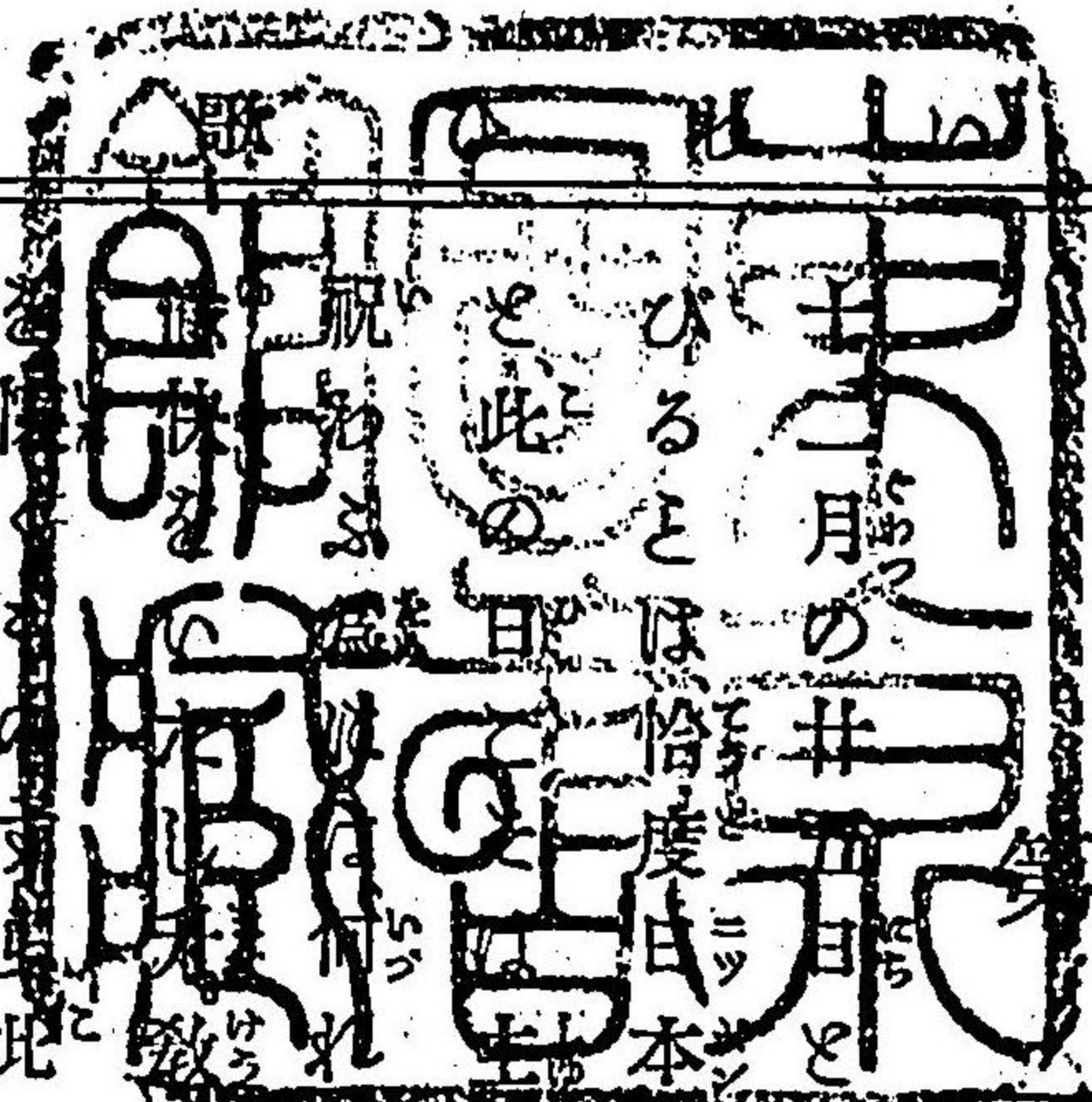


い  
わ  
ひ  
歌

曲



若松 賤子 譯



(一)

十二月の廿五日といふ日は歐米では大切な日で、老少とも此日を待詫  
 ひるとは恰度日本人が正月をまつと同じとてムリ升。なにか故かといふ  
 と此の日には基督の降誕しました日と定めて有るので、其日を  
 祝ふ。此の家も賑は敷子供は遊び戯れ成人も年に一遍の大  
 會にて此の日を記念する式を擧げ讚美歌を唱へ、恨  
 む事なき。此の日を期して和解の手を握るものでムリ升。  
 諸年中に一番おめで度日の曉家の屋根にフワ／＼した雪の降つて居  
 つた頃、ベッドといふ人の家に可愛い、女の子が生れ升た。女の兒で有



つたら、ルーセといふ名をつけやうといつて居つた譯でしたが、クリスマス  
 マスの日に生れやうとは誰も思ひよらぬとでした。丁度クリスマスに  
 生れた赤子などは滅多にない、それ故、命名は疎畧に出来ぬと誰も思つ  
 て、更に名を撰のでしたから、家内評議がなか／＼六ヶ敷なりました。家  
 の人たちは、子供の部屋へ寄つて、相談をして居つたのでした。主人、ベ  
 ード氏の申されるには、これまで三人まで男の兒を自分が主にも名づ  
 けて来たから、今度は妻に任かせてしまわふといへば、總領のドナルド  
 といふ男兒は、學校で自分の次に座わる愛らしいドロセといふ女の兒  
 のことを思ひまして、ドロセになさいといふ。次男のポールは、ルエラと  
 いふ名が一番好いといふ、これは何故かと調らべて見ると、赤坊の時か  
 らポールを育てたばあやがルエラといつたので、何となく心地のよく  
 なる名だと思ふてだといふとです。シヤ、シ叔父さんと呼ばれる人がい

ひ升には「ナニ始めての女の兒は何でもかんでも慈母の名をつけるも  
 んだ、チト可笑げな名でも。あばあさんは其相談には口を出さぬといひ  
 ました。が考へて見ると、その筈、最始ルーセとつけやうといつたのは、あ  
 ばあさんのお名がそれだからのと、今、又た相談のしなほしが始まつ  
 たとて、是非に自分の名といひ張るやうなことはなさらない方だし、ま  
 たそれかといつて、他の名を思付もしないといふ處からでした。  
 今まで坊や／＼で、赤ん坊の位置を占めて居つたヒューといふ三男は  
 何もいはずに片角へ引込んで居り升たが、これは何となく幅がきかな  
 くなつた心地がして居り升た。新しい赤ん坊が来たといふので、澤山  
 なのにおまけに始めての女の兒といふので、家中の人のもて囃やすが、  
 やつかめるも尤もなことです。  
 なせ生れると直から命名の相談をするかといふと、あつかさんといふ



お人は御幣を擔ぐといふでは有ませんが、赤ん坊が生れたら、其日の中に名はつけるもの、名なしで廿四時間の上たてば、運が悪いかどふだとかいつたことがあるので、此通り打寄つたのでした、何はともあれ、産婦に尋ねて見るが上策と評議一決して、さては一同退散といふとになり升た。

ドナルドは今度頂いた自轉車を試みると庭に出で、ボールはブンブン獨樂を廻すとて廊下へ行き、ヒューは少しくすぬた氣味で、そとへも出ず、階子段の手すりへ態と頭をユツ／＼撲ちつけながら、面白くない顔をして、始めての女の兒なんて餘計なものが、また今度生れて見る、其まゝにしては置んからといふ様な考をして居り升た。

話し變つて、ベード夫人は無事に出産を済ませて疲れはしても、新たに對面した我兒に手枕させながら、母たるものゝ悦びをさらに新らしく

感じて居り升た。看護婦は庖厨で粥を拵らへて居り升て、寢室の中はヒツソリとわぎ／＼薄ぐらくして有升た。暖室爐の中には火は賑やかに燃へて居り升て、板窓は總て閉ぢ升たが、たつた一ツ隣り地面の教會に接いた方を少し開いて置き升た。

俄かに音樂の聲が流るゝが如く、湧くが如くに室内に漂ひ升た。何かといふと、子供揃ひが此日を祝わふ祝ひの讚美歌で、清き聲はいよ／＼澄み渡つて望と悦びが聲音に充ち満ちて居り升た。

ベード夫人は夢の中に其音樂を聞き、新たに生んだ我が子諸共天國の門に詣でて、天使が兩人を悦び迎へて居るかと思ひ升た。然るに、側に寐いつた少さな包みものが少しく動き升て、羽毛の戦ぐほど微かな動き様では有升たが、夫人は眼を覺し升た。

夫人は眼をさまし、赤子を尙近く引寄せ升た。此赤子こそ、此蕾の小娘こ



そ、薔薇の花を乳に浸したといわふか、細絹より尙細く軟かき此髪を金色の御光と見て、天人の雛といわふかと眺むる中に、  
いわひ、うたへ、けふの日を

よろこびうたへ、けふの音づれ

“carol, brothers, carol, carol joyfully.”

“carol the good tidings carol merrily!”

と折かへして聞こへる讚美歌の聲はいよ／＼悦びに溢れて居り升た。  
ベード夫人は囁く様な低い聲で、

オヤ、赤ちゃん、わたしは忘れて居升たよ、けふ何の日といふとを、おまへはクリスマススの見だから、カロール(歌子)とつけませう——かあさん

がクリスマススを祝ふ歌だから!

此時、ベード主人はソツト戸を閉ぢてはいつて来て、

何をいつて居るのだ?

ア、一寸、あなた、クリスマスに生れた赤ん坊を、カロールとはどうでせう、可愛いでせう、今しがた、こゝでウト／＼して居升て、あの讚美歌を聞いて、フト思ひついたのですよ。

極上上、おまへが丁度つけさうな名だよ、今度は女だから、慈母にチト似て呉れ、ば好いが。

これを聞いて、ベード夫人は、疲れ切つて居るなかにも、賞られて耻かしさと、嬉しさを、顔をホソノリ紅ぬにし升た、それで、どふ／＼赤ん坊の名が説り升た、カロールはおめで度日に生れたせい、か、大層嬉しさうな赤ん坊でした。クリスマススの眞の悦びを味わひ得る譯はありませんが、めで度、よろこば敷日の精氣を吸ひ、鈴の鳴り音子供、の笑らひ聲を耳にして、世は極樂なりし其日と、同化したものと見へ升た。カロールの唇と頬は南



天の實ほど眞赤に、其眼は星の光を帯び、其笑ひはクリスマス鈴の音の如くに鳴り渡り、其の小さな手は絶へず人に物を與へるとを好み升た。

氣まへの好い兒と申したら、不思議の様でした。カロールが食事をする前には、母かばあやがパンなり、乳なりを、是非一口食べなければならんのでした。菓子にしる、何にしる、カロールに遣りませば、直と半分にして、三人の兄のうち誰れかゝまた貰らはなければならんのでした。さうして、兄たちが態と嬉しげにそれを囁る眞似をすれば手を打つて聲をたて、悦び升た。ドナルドは訝しげに、

なぜ、この見計りこんなことするだらうナ、僕たちこんなとしなかつたつげが、

といひ升と、母はカロールを抱き、め乍ら、

どふいふ譯かテ、クリスマスの見だから、めで度中でも、めで度降誕日の祝福を少し計り分けて頂戴して居るのだらうかテ。

第一二曲

十年の春秋が立去り立歸り升て、またも師走になり升た。カロールはそれまでに九度の誕生日をいわひ、その都度クリスマスの常盤木に蠟燭のどぼるを見、幼いながら、其度に一家族の祝ひを共によるこび升た。

カロールが手づから、どうさま、かあさまの箆笥の中へクリスマス贈物をソット入れ升たのは、漸く五年このかたで、それに付ては前もつてから、小さき胸の中に貯へた容易ならぬ秘密が、堪へ得ぬほど膨脹し升た。その豫防には、夜に入つて、カロールを寝かしつけに來た母の耳を借りて、何もかも一切の白狀をしてしまふのでした。併しさうすればとて、大秘



密の價値が下がつたとは、カロルのあどけない心に少しも思へません  
かつた。

五年この方カロルは毎年世間の子供のする通りに赤き靴たびの大き  
いのを暖爐の側に掛け、その中へ色々の贈り物を入れて貰らひ自分  
クリスマスに生れた證據をサンタ、クロイズ(鹿)に乗り、おもちゃを背負  
ひて來るといふ老人に見せるとて柵木の小枝を寝まきにつけ、其夜は  
毛衣の仙人のこどや、おもちゃの包みのとや、鹿のとを夢に見朝となれ  
ば東の白らむまへに家中の人々に、おめで度うをいひ、午になるまで  
は、今度貰つた、おもちゃを、残らず隣りの子供に貸し、御馳走の七面鳥や  
おくわしをたべ、溢るゝ計りの歡樂を心に湛へて、床につき升た。

さて、此頃から、一番上のドナルド兄さんは、大學へはいつてしまひ、ポ  
ル、ヒュー、兄さんも、あつかさんより丈の高い成人らしい人になつてし

まひ升た。おとうさまの頬ひげも此頃は、白髪まぢりになり、おばあさま  
も、おめで度おなんなすつて、此年で四度、クリスマスを天國で守つて入  
つしやるとでした。

併し、ベード家のクリスマス祭は、昔しと變つて、近年さほど悦ば敷日  
ではなくなり升た。なぜかといふと、其の日のめでたさや、有難さに一入  
の意味を添へた秘藏の幼兒は、月から月を越へて、哀れな痲疾病者とな  
つて、元生れた室に寝て居り升た。生れつき、大して壯健な方では有ませ  
んでした。が、満五歳になつて、暫らく過ぎた中に、一寸氣がつくか、氣がつ  
かぬ位に跛を引く様になつたのを見て、兩親の胸は氷の刃を當てられ  
る痛苦を感じたことが有升た。其の頃から、カロルは頻りに衰弱を覺へ、  
「けふは遊びに行度ないは、かあさま、おうち居て好の？」などといつて、  
母に寄り添ふとなどが度々になり升た。病といつても、始めの中は、極く



軽く母の心に全快の望は絶へませんかつた夏にでもなつたら、カロールも丈夫になるだらうとか、一年も田舎へ遣つて置いたら、よくなるだらうとか、年のたつ中だん／＼癒るだらうとか、醫師をとり代へて見たらなどと、始めの中はいつて居り升たが、癒て醫者も藥石も効なく、凡庸の手だてでカロールの全快は逆も覺束かぬといふとが、明らかに分る様になつて來升た。夏は幾度立返つても、田舎の空気をどの様に吸ふても、天の國にありといふ絶へせぬ夏の美しさを見ずば、此幼兒を健康躰に、恢復さずるとは出來ぬといよ／＼諦らめる様になりました。

以前は南天の實ほど紅であつた頬と唇は薄桃色にさめ行き、星の如くさへた眼は一際柔和に見へて來升た。これはカロールの眼が涙を通して、輝いたからのとでした。さうして、鈴の音ほどさへ／＼した嬉れしさうな笑ひ聲に代へて、何ともいへない程愛らしく、哀れ氣にもまた、優しく、

辛抱づよい様な微笑が顔に現れる様になり升ては、それが爲に、此家は隅々みまでも、キリストの幼な顔から發するかの様な優に柔らかき光明に満たされて參り升た。

掌の珠と此幼兒をいたわり庇ふ、双親の慈愛すら、此際何の益にもたちませんかつた。愛といふものが無益だといへば、尙他に有効物のあるなしをいふ必要は殆んど有りません。なぜかといふと、全世界を擧げて、愛に勝つて力あるものがないからです。ある夕子供たちが、みんな床に就いたあとで、ベッド夫婦が其はなしをして居り升た。其日のとに、ある名高い醫者が來診して、一年かそこらの中に、カロールがまへ振れなく、靜かにもと來た天國へ戻るとがあるだらうと申し升た。ベッド主人は、胸に蟠まる懊惱を漏さんが爲か、書齋をあちら、こちらと歩みながら、

モウ、眼を閉ぢん、見ぬ真似をして居つても、益にはたゝない、カロールは



癒らぬと説つたからナ。これほど可愛いと思ふ兒が床に縛りつけられて、毎日／＼寝て居ると思ふと、逆もわしは堪へられん。わしらが、どの様に手を盡しても、取り除けて遣れぬ苦みをする處を見ては實に／＼たまらんよ。めで度クリスマス處ろか、一年中に一番悲しい日になつちまふナア。

といひつゝ、メイド主人は情に迫つて、ドツカと椅子に腰かけ顔に手を押しあて、止めんとすれど、はふり落つる涙を妻に見せじとし升た。

優しいメイド夫人は顛へ聲になつて、併し子、あなた、クリスマスは先／＼ほど賑やかでない代り、矢ツ張り、嬉しいとは今でもあり升よ、たい／＼賑やかなよりか、よつぽど宜しいじや有ませんか、それに私どもが心から、神恩の深きを感じるゝが出來升もの、それに越した幸がどふ外に有ませう？ 苦しみは有るに

相違ムいません。誰の爲かといふと、わたくしなどは、自分一身のとはモウさつぱり忘れてしまひ升た。苦しみといふはカロールを思ひ升爲計りです。わたくしがあの兒を可愛と思ひ升中に、あの兒が私共二人の爲にも、外の子供等の爲にも、どの位なつて居るかど考へ升よ。ドナルドや、ポールや、ヒューは情のこわい、亂暴な子供でしたつけが、けふになつてあの三人を見て御覽なさいまし、あの位の年格好の男の兒にあれほど優しくつて兄弟思ひで、一躰に控へ目で、人のとを先にするものは滅多にムませんよ。此家には喧嘩もなければ荒い聲一ツたてるものも有はしません。なぜかといふと、カロールが聞けば氣を痛める、あの通り兄弟おもひで、柔和だからといふんでム升よ男の兒たちは一處懸命に勉強し升どふいふ所爲かといふと、一ツはカロールに教へて、自分等が讀んだとを話して悦ばせ度といふのなんですよ。ア



お針が参り升と、お嬢さまのお部屋で仕事をさせて戴き度い、自分の心配を忘れるとが出来て好からと申し升よ、私などもカロールのお蔭でどの位心に益を得て居り升か、私しは心が清くなつたかと思ふ程で、升もの始終、あの通りですから、あの見の眼にもなり耳にもなり、足にも手にも、寄掛にも成て遣なければならぬのですが、其程虚弱ひ我見が却つて親の手本になつて居り升んですもの。

ペード主人は、少しく心に慰めを得たるものゝ如く、さういはれると、矢張り、わしがわるかつた處が分るよ。不足をいふどころではない、悦んでるが當然だ、カロールの様な神のお使が此家に宿つたのだから。

ペード夫人は、あとをつぎ、

それで、わたくしは、あの見の未來のともさう心配するに及ばぬと思

ひ升よ、あの見は私どもの見といふ中にも、丸で私どもについたもの様には、どふしても考へられませぬもの、神さまの思召どほり、世にある間の役目を済まし升たら、またいつなん時元來た處へ呼び戻しになるか知れぬといふ様に感じて居り升もの……ア、それもモウ久しいとはあり升まいナ。

こゝに至つて、ペード夫人の方が涙にたへ入る番で、主人の方が慰める番になり升た。

第三曲

カロールは母の涙も、父の心痛も一向に知らず、元生れた室に穩かなる月日を送り升た。

併し其室といふのが、元とは見違へるほど變つて居り升た。どうしてか



といふと、カロルの父は大層なお金もちで、何もかも自由で有つたそう  
 でした。其お金で秘藏娘に健康躰を買つてやれないと思ひ升時には、黄  
 金も、白銀も、みんな海へ投げてしまひ度時もあるらしいのでした。が、さり  
 とて切めてものにと娘の居る部屋を力の及ぶ限り美しく住よくする  
 とには悦んで、つとめ升た。  
 元來の部屋へ建増しをし、下の庭へさしかけて、一際大きな坐敷を拵ら  
 へ、これへ玻璃窓を三方につけた處は、丸で花の室を見る様でした。それ  
 故傍の窓はこれまでより一層教會に近く、前の方は眺望の好い港を見  
 晴らし、裏の方の窓からは、小さな路途の外は格別何も見へません。かつ  
 た。然るに此裏窓から見へる物は、カロルにとつて最も面白いでした。な  
 ぜかといふと、此路途には、ラグルス一家族が住居をして居り升て、九人  
 といふ大中小のラグルス家の子供は、カロルに、此上もない面白味の種

でした。  
 玻璃窓外の板戸は開ければみんなカラリとなり升て、カロルが此愉快  
 なガラスの家に座つて日向ぼこりをするも自由なり、また可哀さうに、  
 頭が痛むとか愛らしい眼が疲れて居るとかの時などは、悉皆閉ぢてし  
 まふとも自在でした。敷物は薄鼠に柊木とベアの木の緑の葉を散らし  
 たので、道具は白木で、これへ畫工が雪景色やら、クリスマスに建てる常  
 盤木やら祝ひ歌を歌つたり、鈴を鳴らしたりして居る嬉しげな子供な  
 どを畫き升た。  
 ドナルド兄は、奇麗に艶をかけた柵を拵らへ升て、これを寢臺の足止り  
 の外へ餘ですつかり拵め込み、此上には兄たちが絶へず花の咲く盆栽  
 を置き升た。寢臺の頭の方にも、兩方に盆栽の臺が有升て、これには例の  
 美事な處女の髪といふシダが植へて有升た。



カナリヤや愛鳥などが金光りの籠にはいつて下つて居り升て可哀さうに、カロールが寢床を離れられぬと同様泊り木を離れるとが出来ないのでした。

部屋の方には數百卷の書物……本當に數百卷並らべて有る書棚が有升た。其書物の中には華やかな挿畫のある者もあり、ないものもあり、みだしの一章毎についたのも、一切附いてないのも、詩の書物も、おはなしの本も、子供を笑はせる本も、泣かせるのも、幼ない人たちの讀む、やさしい文字の本も、學者な子供ももて餘ましさうな六ヶ敷いのも色々有升た。これがカロールの圖書館で、土曜日になると、カロールが手づから十冊の本を撰らび、其表題を小さな手帳にどめて置いて、これへ一々名刺を入れ升た。そして其名刺には、此本を二週間も留め置きなされ候て、御讀み被下度候へ、ド、カロールよりと認め升た。

それから、ベード夫人は馬車に乗つて、其十冊の本を育兒病院へ持つて行き、二週以前に置いていつた十冊を持つて歸るが例でした。

これがカロールにとつては、非常な樂しみでした。なぜといふと、病院の子供の中で、手紙が書ける位な年齢好で、書く丈位には、病の癒へたものが時々、其書物を讀んだとつて、可愛い手紙をよこし升と、カロールは亦其返書を書のでした。さういふ風にして、自然お友になれたのでした。おかしい様なものですが、人がお互ひに愛す様になるには、是非逢はなければならんといふものでは、有ません。みなさん御考へなさつて御覽なさい、わたくしの申すとが間違つて居るか、どふですか。部屋の三方には、板のハメが有升て、其上へ金椽の額面になつた、一面色々に彩色した玻璃の澄きとふる畫が並べて有升た。これを一枚／＼見行き升と、自然さま／＼のお話しが分る様にしてあつたので、其話しの中には、日本の子



供のよく聞く、猿蟹や、舌切すいめ、桃太郎や、紅皿などの顔が有升た。それからまた、さまざま、美事な着るものが戸棚に一杯はいつて居り升た併し、外表へ着て出る様な衣類は一切なく、寝まきや部屋着、シャウルや、上靴の類のみでした。それからまた、おもちゃが一杯はいつて居た引出しが有升たが、これは、何れも膝の上でもて遊べる様なもの計で、手搦とか、羽子板とか、弓矢とかいふ類のものは一つも有ませんかつた併つまり、カロールは、これ等がなくつて不足といふ處は見へませんかつた。却て自由のきく他の子供たちの方が、どの様なおもちゃを持っても不足らしい處が見へ升た。カロールの如きは、持つも、持たぬも、いつも幸で、満足して居らぬといふとは有ませんかつた。カロールが生れて、八度目のクリスマスに、カロールの部屋を此通り、奇麗に飾り升て以來、カロールは戯れに自分を指して鳳凰(英語で Bird of Paradise 即ち極樂鳥)と呼び升た。

師走のこの頃、カロールが取り別け、いつもより嬉しがつて居る譯が有升た。何かといふと、叔父さんのシャツクといふ人が、ヨウロッパから休暇を幸ひ、來るといふ便りが有つたからでした。此大好な、面白くつて、可笑くつて、懐かしくつて、氣の利いた叔父さんは、二三年に一度、キット、故郷へ歸つて來て、其都度家中溢れる計りの悦びを持つて來るので、再び海を渡つて外國へ歸つたあと一週間位は、世の中が夕立前の雲ほど暗く見へる程でした。

此頃の郵便船で來た手紙は、一寸こんな鹽梅のものでした。米國の離島にクリスマス、祝ひ申進じ候願わくは、各個、少しく翼を清め、巢を擴て來らんとする祝の日に、シャツク叔父をうけ入よ。余が携へんとする櫃には、珍しき寶あまた入たれば、おん身等は從來の靴足袋にては事足るまじく、パーナムの見世物小屋より、大男大女の靴下



にても借用なされずばかなふまじと存候余が來らんとする一ツの  
 理由は彼のいたいけなる雛娘を嫌といふほど抱きめめん爲に候其  
 他先頃買ひ求め候黒き小馬の世話を頼み度存候に付其人を探見の  
 爲に参り候譯に候甚だ不思議なるには此小馬こそ殊の外笑窪が  
 好に御座候然るにヨウロツバ諸國を探ね候も未だ一人の適當なる  
 人見出し不申是非ともこれを故郷に尋みんと考へ候とに候此時ヒ  
 ユーは大聲に甘いぞく大分笑くぼの風なみがよくなつた、モウ男  
 で笑くぼがあつたつて恥は、かゝないやといひ升た  
 御都合によつては此年こそクリスマス木の木は大木にして貰らい度  
 候三四年前ありし四五尺のひこばへは眞平御免に御座候物置に建  
 てる方御都合よければそれにも宜しく萬一屋根に支へ候様なれ  
 ば、穴をあけ候ても大事御座なく候

ブリゲット(お三)に七面鳥の用意を今より仰せつけられ度候。廿日頃  
 までは其七面鳥は二本の足に立つて居られぬほど肥らせねばな  
 らずと命じられ度候。残る三日間は横に寝かして樂にして遣り尙其  
 上ハチ切れるほど餌をかへ候様致し度候。  
 菓子もなる可く大きく搾らへ杏はなる可く澤山に入れ、甘く鹽梅さ  
 れ度頼み入候。叔父は大概廿日までには來着いたし、何かの指圖を自  
 らせんものと考へ候へども萬一後れし時の爲め、かくは委しく頼み  
 置候。  
 カロルには木を撰んで貰らひ度候。クリスマス見なれば、カロルより  
 外に撰び得る者なし。序に笑くぼのある人をも見つけて貰らひ度。多  
 分間近に見出し得ると信じ申候。七面鳥のとも、ブリゲットにいひ  
 つけて貰らひ度候。菓子の中へ杏を入るゝにも是非カロルの手を借



り度。カロールがあんずを入れしならでは、此叔父は其菓子一切も食らふまじく候へば、ブリゲツトは心得て嬢さまのお部屋まで持参にてお頼みいたすべし。クリスマスを待つに付て此叔父に何より大切なるはカロールに候。カロールなければなんぞクリスマスがクリスマスならん。世界中の七面鳥よりも、菓子よりも、林檎よりも、宿り木よりも、櫛乗よりも、何よりも叔父はカロールが好に御座候。クリスマスのお祝ひ歌の中に、カロールほどもめで度美事に出来たもの御座なく、叔父は漁船漁車の叔父を乗せて走る丈早く、口づからカロールに其事を申聞かせ度大急ぎいたし居候草々

ジャツクより

ベード一家へ

カロールは此手紙を読んで大悦びをいたし升た。ベード夫婦もカロールの

第 四 曲

兄たちも大悦びに悦んで子供等は餘り大きな聲をたてたので、裏のラクルス一家では一同戸口へ集まつて隣りのお邸では何が始まつたかどヒツクラして居り升た。

ジャツクをぢさんは間違ひなく廿日には到着いたし升た。よくお話にある様に用向まで後れもせず置いてけぼりにもされず雨風や雪の爲に妨げられもしませんでした。お話しどころか實際にもあつて困るとですが、ジャツクをぢさんは滞なくカロールの處へ参り升た。詭への七面鳥は食べ過ぎて天死をしそこなつて漸く助かつて居り升た。ドナルド兄さんも参り升た。ドナルド兄さんのお鼻の下にはむく毛ら敷ものが際立つて見へて居り升た。さうしてギリキヤラテンが直ぐ舌の先に



いて居て、あの頭にどれほどの學問がはいつて居るものかと思ふ位えらくおなりで、おまけに、箸のあげ下ろしにも、大學で何があつたかにかあつたの話しが出ないとは有ませんかつた。どちらか一人は必ずカールの枕元について居り升たが、これはカールが何となく、いつもより一際顔の色がわるいと思ふ處から、側を去りかねたのでした。併この頃夕ぐれの静かな折々、カールの側に坐つて居たのは、シャツをぢでした。まだ燈はつけず、外の雪あかりと、暖爐の火とで、部屋が暗がり、薄あかりにして、爐にもゆる炎はガラス畫に照り添ひ、一入の艶を見せる頃、瘡せたと、青白いとも、近ごろはいよく、眼にたつカールの手をツクをぢは、しつかりと握り占め、心静かに色いろと話して居り升た。をぢの着した其日の夕ぐれ、カールが、かふ申し升た。

をぢさん、あたし今度のクリスマスにしよふと思つて、説めて置い

たを、みんなをぢさんにお話しし度、いつもよりかなほど、一番面白くするんですから、キー兄さんたちは、あたしがあんまり一處懸命だつて、お笑ひなさるけれど、たゞクリスマスだからといふ計りじや、こんな一處懸命になりやしませんのよ、それじやアあたしの誕生日日だからかつていふと、それ計りつていふのでもないの、たゞね、あたしが病氣になり始めに、クリスマスの朝眼がさめると直さういひくしたのですよ、けふはキリストのお誕生日で、それからあの、あたしの誕生日だつて、みんな一處にいひやしませんよ、好ござんすか、それじやあんまり勿躰ないから、それだから、最初に大きな聲で、キリストのお誕生日でといつて置いて、一寸してから、小さな聲で、それから、あたしの誕生日だど口の中でいふんですよ、ですから外の見とちがうんですよ、クリスマスのとになると……かあさまが、まだクリス



マスに生れた兒は世間にいくらも居る筈だつて仰るんですよ、をぢさん、みんなどこに居るでせう子、いつでも、あたし考へてるんですよ、さういふ兒はみんなあたし見た様に、クリスマスに生れたツていふのが、こんなに嬉しひだらうか、それとも、あたしはこんなに病氣だつたり、一人で静かにして居る時が多いから、尙と大切に考へるのかしらと思つて升よ、どうぞさういふ兒は誰も貧乏だつたり、寒かつたり、お腹が減つたりして居なければ好い、が子、とおもひ升よ、さうして、みんなあたしの様に幸に居れば好い、子を、をぢさん考へて見るとさういふ兒は、みんなあたしの兄弟です子、本當に……さういふ兒は、ママ、どこに居るか知れないけれど、あたしはクリスマスに誰かに誰か人を悦ばせ度と思つたんですよ、今年はどうか、裏の路途に居るラグルスの子供にし度と思つたんですよ。

なに、あの裏庭の向ふの小さいうちに住んで居るひよつとと寄せた様な子供のとかへ、  
エー、おんなに大勢一處によつて居ると、本當に好い、子、ア、をぢさん、なぜでせう子、たんとの家は小さなうちに住つて、すこし計りの家族は却つて大きな家に住ぶのは……ドナルド兄さんが裏のラグルスたちツて言ひ始めなすつてから、をくさまも、かあさまも、みんな裏のラグルスたちツていふ様になつたんですよ、あの小家はカーターさんの御者の居るところに捲らへたんだけれど、カーターさんたちはヨーロッパへお出になつて、あとの家をお借りになつた方は、あの小家はどふなつても好ツて、仰しやるもんだから、それで、あの貧乏な人たちが、あそこへ來たんですよ、始めて引越して來た時、あたし、窓どこへ坐つてよく見て居たんですよ、あそこ、裏で遊んで居る



どこをみんな丈夫で、お人好で、元氣の好兒なんですもの、さうすると、いつかあたしが大變に頭が痛い時があつたんです、それから、ドナルド兄さんが向ふへ行つて、どうぞ、もう少し小さな聲で遊んで下さい、ていつたら、あの子供たちが、アノ馬かけの真似をして遊んで居たことだけれど、これからは盲啞院のとして遊ぶとにしませうツていつたつて、

「ジャツクをぢさんは、此時笑らひ出して、ハ、ハ、ハ、大層譯の分つた人たちだナ。」

「エ、みんな、其話しを聞いて、大變可笑があつたんです、それから、あたしがまたよくなつて起きられる様になつてから、窓から向ふを見て、ニコ／＼して居たんです、此節は子供たちが學校から歸つて來ると、セーラが、戸ノとこへ來て、こつちを見て居るんです、さうすると、かあさ

まが出で入つて、お頸びを宜しいといふ様にかふなされると、それは、カロールが今日は心もちが宜しいといふ譯になるんです。さうすると、子供たちが、みんなして、怒鳴り升こと／＼をぢさんに聞かせて、上度様ですよ、てんでに、怒鳴りツくらするかと思ふ様ですよ。さうでなくつて、かあさまが、おくびを横に、かふお振りなされると、いつでも、静かにして、遊んでくれるんですよ。いつか、あたしの飼つて置いた、ヤンといふカナリヤが、籠を抜け出して逃げ出してしまつたんです。さうすると、「ピーターアツていふ兒が、つかまへて持つて來て呉れたんです。それから、あたしが二階まで呼びあげて、お禮いつたんですよ。」

「ピーターアツていふのが總領かへの？」  
「い、へ、セーラといふのが一番の上です、それが、洗濯の手傳をするんです。ピーターアは其次です、あれは仕立やへ年期にはいつて升んです。」



毛の赤い奇麗な兒はなんといふの？

あれは「キテ」

肥つた小さいのは？

あれは「ラレ」ツていの

それから、あの蕎麥かすだらけのは？

をぢさん、笑ッちやいけませんよ、あれは「ビオリヤ」ツていふの。

カロールも冗談もんだ子、

アレ、をぢさん、本當ですよ、「ビオリヤ」で生れたからツていふ丈ですよ。

其次のは、「オミユシ」どでもいふのか？

カロールは笑ひながら、

いゝへ、其他は「ストーザン」に「クレメント」に「イーレン」に「コーニリアス」  
ですよ、みんなおんなじ様な兒ですよ、蕎麥ツかすが多いかすくない

か丈で。

カロールはどうして、そんなに一々名を覺へたのだ？

あの子、今は寒くつて、いけませんけど、暖い時には、此窓から、學校を

こして遊んだことがあるんですよ、あたしは窓どこへ腰かけへ掛

けたまんま、引ッ張つて貰ふと、向ふでは、塀のきはへ並んで、それから、

あたしがお話しの本を讀んで遣つたり、自分でお話しをしたりする

んです。いつかは子、みんな一番大切だと思ふものを話しつこしよふ

ツていつて、一人づゝ話させて見ると、それはくゝおかしなといふん

ですよ。どうさまなんか聞いて入しつたけど吹出しさうになつて、逃

げてツておしまひなすつたんです。ストーザンは行李が一番大事だつ

ていふんですもの、コーニリアスは乗合馬車ですと、それから、キテ

は豚の煮たのですツて、クレメントの番になつたら嬉しさうな顔を



して、自分の持つてる跛の犬が一番大切だつていつたんですよ、可愛  
いといふじや有ませんか？  
さうかへ、あたしたちは好教へになる子、さういふ話しは。  
エー、かあさまもさう仰つたんですよ、それから、おさん、あたしは  
今年のクリスマスをみんなラグルスの人たちに遣つちまふ積りで  
すよ。さうして其お金も半分計りは、あたしが儲けたんですよ。  
なに、カロールがか？、それはまたどふしてだへ？  
でも子、おさん、どうさまが、お金をみんな下さつたんじやア、あたし  
のクリスマスでなくなり升から子、キリストのお誕生を守るんだか  
ら、あたしが自分で何か少し勉強し度と思つたんですよ、だから、かあ  
さまにお話して見たんです。かあさまだから、すぐと丁度好考へが出  
たの、いつもさうですから、かあさまのおつむりなかには、大變好

い考へ計りが一杯はいつて居升から子、あたしが尋ねさへすれば、丁  
度入用のがピヨイと出て来るんですもの。此ノ時のかあさまの考へ  
で、三年間部屋住ひせし少女の話しといふ題でしたが、どうして遊ん  
だり慰んだりして、日を送つたといふ話しをかあさまが、あたしのい  
ふ通りにお書なすつたんですよ。それから、それを雑誌へ送つて遣つ  
たら、廿五ドルよこしたんですもの。子、好いでせう！  
そりやア大したこつた子、どうも、このお嬢さんが作家におんなな  
さつたとは、それで、その御自分のお金で、どふしよふと仰るんだ子？  
あたしはこの部屋で、ラグルスの九人の子供に立派な御馳走を一ツ  
しよふと思ふんですよ、それはどうさまの寄附なんです、そのあとで、  
あたしのお金でクリスマス、トリイを建て、花の咲いた様に、色く  
の送りものを下げてやらふと思つてるんですよ。廿五圓のお金にま



だ少し足まへをする工夫をして升から手、なんでもあたしの買度も  
 のは買へるんですよ。それで、をぢさんが御飯臺の上席に坐つて下さ  
 れば、モウそれで、何もかも充分なの、シヤツクをぢさんを、こわいと思  
 ふ人は誰もありませんし、こんな可愛くをぢさんだもの！  
 かあさんも一所に居て色いろの世話して下さる積ですけれど、どうさ  
 まど、兄さんたちは、ヒヨット、ラグルスの人たちを究屈がらせてはい  
 けないから、下でめしあがるの。それから、木を見せて面白いと思ひ  
 してから、この窓をあけて、みんなして、教會の夜の音楽を聞く積り、  
 もし子供たちが行く前に始まつたら……あたし其積りで、教會の  
 オルガンひく人に此手紙を書いて見升たよ、アノあたしの一番好きな  
 歌二ツ出して下さいって頼んで置たんです、をぢさん、好いかなんだか、  
 見て、頂戴な？

一筆申上候私は教會のおとなりに住居する病氣の少女に御  
 座候私はめつたにそとへは出ず候故ち稽古日や日曜日  
 の歌は大層樂しみに伺候  
 來るクリスマス之夜には“Carol, Brother, Carol,”といふ讚美歌  
 御歌ひ被下間敷や其他“My ain coutrie,”といふ歌あの様  
 に美事にうたひ玉ひし方御出ならばそれも序にねがひ度候  
 私はあんな愛らしき歌はないと思ひ候がいつも泣出し度相成候  
 あなたは如何に候や  
 御都合よろしくば兩方とも少し早く御うたひ被下度私  
 も十時過には眠りにつくかも知れず候故左様願上候敬白

ベッド、カロール拜



ウイルクィー殿御まへ  
 二白私が Carol, Brother, Carol が好に御座候故は十一年前教會にて少き方々が御歌ひに相成候より母が私をカロールと名づけよふと思ひついた故に候母は姓のペードなるといふとは忘れ居り候病氣の時故一ツづより考へが出来なかつた故に候、ドナルド兄さんは七月四日に生れたらばインデペンデンス(獨立)とつけたかも知れずとて笑ひ申候併し私は自分の名と誕生日が一番好に御座候

ジャックをぢさんは滞りのない手紙だ、結構だと申し升た。さうして、オルガン引に、家内の私事を色々打聞けたとて、別段笑らひもしませんでした。

さて正月などには格別日足の早いもので乍ちクリスマスの前日となり升た。此日は家内の祝ひやら、御馳走やらが有升て、みんな結構なものでした。翌日のお振る舞の仕度が、尙一層大したものでした。併し此日もカロールとカロールのお合手で、獨逸から來て居る女中が書物から引出したり、さまざまの國々の習慣にならつて工夫するので、珍ら數遊戯や勝負事の數々が、夥しく多くなつて、いつて見て居るものも、この國で、クリスマスを守つて居るとやら、分らない様になる位でした。カロールの指圖で、犬や猫までが御馳走に與り升た。庭へは粟を澤山雪の上へ蒔いて、明朝小鳥の隊はむに供へ、暖爐の側には、サンタクロイスの鹿が、長途の疲れを養ふ爲にとて、藪を澤山に積んで遣り升た。これは本の冗談でしたが、カロールの悦ぶ様にとてしたとてでした。

御馳走のあつた後、一家族がクリスマスの裝飾を見んとて、教會へ出か



けたあとで、カロールは跛引く横杖にすがつて例の女中に手傳わせつ、二階の廊下へ家内中の靴をならべ升た。第一にとふさまの丈夫さうな長靴、次にかあさまのきやしやなボタン靴、それから、シヤツクをぶさんの、ドナルド兄さんの、ポール兄さんの、ヒエー兄さんのと順くにならべて行き升た。さうして一番末の端に自分の小さい白い毛糸編の上靴を置き升た。これは何が爲なれば、一年中家内の人たちが仲よくして喧嘩をしない爲でした。一番終りには一番可愛いことをしました。何といふと、オーストリヤの子供にならつて窓ぎわへ蠟燭を點して置くとした。これは幼きキリストが深夜人足の絶へた日、市街をたどり玉ふ時、躓き玉わぬ爲めといふ意でした。これをしてまふと、カロールも疲れて床にはいり、あしたを樂しみに眠りに就きました。

第五曲(上半)

ラグルスの子供で一番早起きなのが、またいつものグリキ喇叭を吹き始めぬ中に、お袋はモウ夙に起き出で、大忙がしをして居り升た。なぜかなれば、此家にとつては、けふといふけふ、天下晴れてのめで度い日でした。晴れとも、晴れとも、家の九人の子供が表の、あの大きいお邸へ御馳走に呼ばれて、國中の歴々と同席することですもの、此家にとつては、それこそ空前絶後の晴れ日でした。慈母は其招状が來ると、すぐ仕度で大騒ぎを始め升た。オ、それ、其招状といつたら早速古寫眞入へ箆め込み、これ見よといはぬ計りに、臺所の一番目にたつ鏡の下へ、下げ升て、折々出はいりする人を羨しがらせ升た。  
一寸申上候、このクリスマスには御馳走を致す筈に御座候へば子



供衆みなさま御遣はし被下度候、セイラ様より一番小さいラレさ  
 ましでみな様御出被下度御待申上候御飯は五時半頃よりいた  
 し七時よりクリスマス、トリイに相成候間九時ごろにはお歸りに  
 なる様致さんと母も申居候  
 クリスマスも正月もめで度御祝被遊候様ねんじ上候

ラグルス奥様御まへ

ベード、カロール拜

朝飯の時になり升て、お袋の心の中に、けふこそは、腹一杯食べさせずと  
 も好い、少々づゝへずるとにしよふと考へ、膳に並べたものは、いつもほ  
 どの分量が有ませんかつた併しけふの御馳走が翌日幾分か賄の足し  
 になれば結構だが、中なかどうして、子供たちの丸で風船玉の様な腹は、  
 干上げて置いたも同然、あすはひもじがるだらうと思ひ廻らす慈母は、

自然嘆息を漏らすも無理で有ませんかつた。

なけなしの朝飯をしまふや否慈母は部卒どもに一々軍器を授けまし  
 た。サア、スーザンは、キチと流し元の洗ひ場を片づけな、ピータアは床  
 をしまふが好いせ、かあやはモ少し縫物をしなけりや、ならんから、イ  
 レは、かあやが取りに遣るものが有る。ソレ用の出来ない、小さいな  
 ア、邪魔するるときかないぞ。クレムや、おまへ、コンとラレをつれて、あの  
 床の中に、ちつどの間はいつてなッテいふとよ、おまへたちの褌袷洗  
 つて遣るんだからよ、ナニ直ぐ乾くさ。さうよ、嫌だらうが、仕方が有り  
 やアしねへ、おまへたち、お客になつて行くんだらう、それに、その位の  
 辛棒が出来ねへじや、仕方アねへ夕部かあやが、どうしても、それまで  
 手が廻らねへだもの。セイラや、おまへ、おぢさんの巡査の服について  
 る、眞珠のボタン取つて、おまへの腰袴のまへへづつと並べて、くつつ



けて見な、どんだ氣の利たものになるからよッ……スーザンは、キチのど自分の前掛に火のしイかけなけりやいけなはいよ……アレッ、もちつとで忘れるとこだつたよ、夕んべ、洗濯ウするとつて、勘定して見ると、どれイをれおッつけて見ても、十七しかねいじやねいか。まさか、あらアほどの育ちイしたものが、子供らあんなどけイ客に遣りていに、チグハグの靴たびイ穿かしても、遣れないからな……だからな、イイレ、おまへ、カレンさんとけイ行つて、おかみさんに靴たび一足ピオレのに貸しておくんなさい、其代り、ピオレが歸ッて來ると、貰ッて來た菓子イ半分、ヂム(息子の名)さんに上升からッて言て來なよ、ピオレ、おまへ遣だらう、やッ?

頑(くわん)はないピオレは、食(た)べ度(たい)が病(まひ)で、みんな代々(かゝ)の理屈(りくつ)はさつぱり解せず、ワアッど計りに反對説(はんたいせつ)を鵝鳴(がな)り出し升(しやう)た……餘(あま)り理(り)も非(ひ)も分(わ)らず、

強情(きやうじやう)に鵝鳴(がな)り續(つ)け升(しやう)ので、慈母(じぼ)も耐(た)へ切れず、眼(め)をひからかせ、手を舉(あ)げて、にぢり寄り升(しやう)た。併(し)し急(い)ぎに手(て)を下(くだ)ろして、

いや、よさう、クリスマスのことつてもあるから、おまへたち逆上(さか)せ上(あ)る様な真似(まね)イしても、ぶんなぐる丈(た)はよさう、だが、しつかり返答(へんたう)しな、おまへ、どつちにする、歴(れき)イ丸出(まるだ)で、お客(きやく)に行くか、それとも菓子イ半分、ヂムツ見(み)に遣(や)るか、やア、どつちとも、いつて見(み)なッていふとよ。

物の道理(たうり)をはつきりと、言(い)ひ聞(き)かせられて、流石(さすが)のピオレも、やつと分別(ぶんべつ)をつけ、涙(なみだ)を止め、禍(わざはひ)の少(すく)なき方を撰(えら)び升(しやう)た。尤(もつと)も其決(そのけつ)心(しん)は、クレムが自分の菓子(かし)を半分(はんぶん)ッこにしよふといふ愛嬌(あいきやう)ある、眼(め)くばせで、餘程(よほど)早く出來(で)た様子(ようす)でした。慈母(じぼ)は、やうやく、機嫌(きげん)を直(ただ)し、

それでこそ、お嬢(ぢやう)さま、サアなんにも、用(よう)がねい子供(こども)らア、午(ひる)までさんざつぱら遊(あそ)ぶが、好(こ)い午飯(ひるめし)をたべて見(み)ろ、セイラとかあやで、それこそ、



ひつこすつて、ひつと加して、おまへらが生れてから、されたことのぬいほど奇麗にして遣から、それからみんな、チャントお召し變へして、サア、これで好ッていふ時になると、それこそ、座らせて置いて、二々時も行儀イ仕込んでやるから、ふざけるところじやぬいから、さう思ふが好よ。

ピイターといふ男の兒が、口の中で、ブツ、  
 みんなが行つて、食いさへすれば好、ンじやぬいか、  
 さうよ、食へば好ッて、食ふにも幾通りもあらアな、おまけに、おまへな  
 んぞこそ、どれほど行儀イ教せいでも足りやしぬいぞ。それこそ、  
 かあやなんどが、食ふ時の行儀イ仕込まれたとて、おまへらに見せて  
 遣りてい様だな。かあやなんどは、それこそ、臺所なんぞで、一度もおま  
 んま食つたとア有やしぬいぞ、こゝへ嫁に来るまでッていふもの、そ

れでも、仕方がぬい、をやぢア、船に乗つていつて、いつでも留守だし、家  
 にア、九人も少せいのが頭ア揃へてゐるッていふんじやア、見へも何  
 もして居られぬいからな。

大きな子供は思ひ存分働らき、小さな子供たちは慈母の威勢に怖ぢて、  
 いはれる通りに遠く避けて居り升たので、午後の一時といふと九揃ろ  
 ひの着物が、まんまと、そこへ並らび升た。一ト揃ひといつた處が、極く上  
 等な社會では揃ッたとはチトいひかぬる鹽梅でした。併し埋め合はせ  
 は漫邊なく、つけて有り升た。襟飾りのあるものは、カフはつけず、帯をつ  
 けたものは、ハンケチは持つて居りませんかつた。またそれが、あべこべ  
 で、カフを箆めて居るものは、襟飾はあてがはれず、ハンケチの便利を持  
 つ人は、帯の飾なしで、間に合せ升た。併し靴を穿かぬものは一人もなく、  
 着物もどふにか、間に合ひ、兎に角上部丈では、さほど見ともない處は有



ませんかつた。  
慈母は眞赤な顔になつて、姉嬢に、

サア、何もかも仕度(しど)は出来(でき)たから、始(はじ)めるとしよふせ、釜(かま)にも、鐵(てつ)びんに  
も、小桶(こぶく)にも、湯(ゆ)が入れ(い)れてあるからな、かあやは、スーザンとキチと、ピオ  
リヤと、エーニアスとそれ、丈(たけ)は受け持(も)つから、セイラはクレムとラ  
レとそれ、丈(たけ)ひとり、洗(あら)つて遣(や)つておくれ、思(おも)ふさま引(ひ)つてすつて、  
あどヲせつせつと流(なが)してな、其(その)中(ちゆう)に、かあやが仕上(しあげ)イに行(い)つて遣(や)るから、  
それから、あまへ自分(おれ)の身(み)じまひすれば好(い)いや。

セイラは板(いた)の間(ま)の雑巾(ざつけん)がけをするといつても、これまでといふほど勢(いきほ)よく磨(こ)り升(しやう)た。さうして、ラグルスの面(めん)々は天性(てんせい)の勇氣(ゆうき)はなくとも、眼(がん)前(ぜん)の樂(たの)しみに免(めん)じて、きつくなつて耐(た)らへ升(しやう)た。併(しか)し餘(あま)り見(み)つともない蕎(そば)麥(あ)粕(あ)だどてみがき砂(すな)を少し頬(ほ)になすり升(しやう)た時(とき)丈(たけ)は、流(なが)石(いし)辛(から)棒(ぼう)強(つよ)い子(こ)供(ご)

らも、勘(かん)忍(にん)袋(ぶくろ)の緒(いと)を切(き)らし、少(すこ)しく不平(ふへい)を鳴(な)らし始(はじ)め升(しやう)た。時計(とけい)が四(よ)時(じ)を報(は)じ升(しやう)た頃(ころ)には、一(いつ)同(どう)大(だい)約(やく)の身(み)じまひが出(で)来(き)上(あ)り升(しやう)たが、さてこれからは、一(いつ)番(ばん)暇(ひま)のかゝる何(なん)かの飾(かざ)りや、そここのとりつくろひが始(はじ)まり升(しやう)た。

キチの赤(あか)ッ毛(け)は卅(さん)四(じ)束(たば)にちいらされ、セイラのはチャン／＼の樣(よう)に一本(いっぺん)に編(あ)まれ、スーザンとイーレンのは二本(にほん)づゝに組(く)まれましたが、ピオリヤの丈(たけ)は、いくら油(あぶら)でなづけよふとしても、栗(くり)の毬(まり)の樣(よう)に逆(さか)立つて、到底(たいてい)修(お)まりがつかませんかつた。其(その)混(ま)雜(ざつ)の眞(ま)最(さい)中(ちゆう)、クレムが、其(その)ツツ立(た)つた髪(かみ)を何(なん)の樣(よう)だとかいつて馬鹿(ばか)にしたとて、慈母(おむ)の機嫌(きげん)を損(そ)こぬ戸(と)棚(たな)へ入(い)れられるやら、ピオリヤに詫(わ)めて貰(もら)つて、漸(や)やく出(で)して貰(もら)うやら、大騒(おほさわ)でした。それから、カラをつける領(ねい)飾(かざり)を結(むす)ぶ帯(おび)を巻(ま)く……それから、ピータアの紫(むらさ)色の領(ねい)加(か)ざりへ、麗(れい)々(々々)と眼(め)にたつ緑(ろく)色のビードロ製(せい)ピンを縫(ぬい)



つけるといふ魂膽があつて……さてはく、ラグルスの面々が一生の晴れといふ紛装もいよく出来上り升た。

第五曲(下半)

それから勝手の中へソウト椅子を並らべ升たが、十人前丈椅子の揃はぬのも尤のことでした。なぜかなれば家内中一度に腰かけ度と思つたとは極く勘いどで誰かしら他出して居るとか、床にはいつて居るとかで其間甘く融通がついて居つた譯でした。併し薪箱と炭取りが出て漸く敷が揃ろひ升た。子供等は齡嵩を始めとして順序よく列らび升た。即ちセイラを頭に炭取りの上に座つたのは、ラレでした。さうして、ラグルス夫人は律義な骨折に流した汗を拭ひも合へず、相對して向ふへ腰をかけ満足さうに子供等を眺めて居り升た。

サア、これで、わしがいつちやア可笑しい様だけど、こんなに揃ろひも揃ろつて奇麗で、氣の利いた子供らア見たとがねへよ！どつさんに一目見せて遣てい様だ！ラレや幾度いふんだナア、帯イ捨くつちやいけねへつて、さういつて聞したらう、其帯が解ると、其着物が上下くつゝいちや居ねへていとナ、ヤア、さうしたら、おめへ、どうするのだ？  
——サア、みんなが、よしか、かあやの顔を、みんな見て居な。かあやの里のムツクワリルスといふのが、どんな家柄だといふとは、よふく、おめへらに、話して置いたらう。わしらア、大威張りなんだ。おめへらア叔父さんていのは、紐育の警察へ出ていて、新聞見りや、毎日の様に立派に名めへが出て居よふが——だから、逆も他人みた様に、ぞんざいものに子供を育つちや、濟まねへんだ。他所へでも行く時にア、見つともなぐねへ様な着物も、着行儀も、氣いつけなくつちやならねへだ。おめへ



らア今夜あすけへ行つて、どんなことをオするか、見ているんだ。始  
めつからすつかり、やつて見よふ。そんだから、サアみんな一旦戸の向  
ふへ出て見な。それから、あすこん家の座敷へいる時、どんな真似する  
か、見てやるから。こつちが座敷の積りで、かあやが、ベードの奥さんに  
ならア、  
子供等は擦れつ、もつれつ、大騒して、次の小間へ退ち升た。さうして、ラ  
ルス夫人のツント濟まして、反身になつた處の高慢に、さも身上が自慢  
だといひさうな様子に、扣へ目でしとやかなベード夫人には似もやら  
ず、矢ッ張り、ムツングリルス一族の人とよりは思はれませんでした。  
後ろの部屋は小さいのに、子供が大勢なので、中の騒ぎは牧場の獸が一  
時に逃げだしたかの様でした。が、さて母親が、サア、は入れといつて、戸を  
開け升た時、竊盜犯の罪人でもある様な歩き振りのセイラを先にたて

子供たちは、クツクツ笑らひながら、ソロロといつて参り升た。ラ  
レは、一列の最末に居て、其戸が天國の門でも有つて、時に間に合はねば、  
べ切られるとでも思つたか、兄や姉たちを突き抜いて、もぐり込み升た  
處が揉まれる拍子に轉ろんで、これは大失敗でした。  
ラグルス夫人は、恐る敷顔して睨まへ升た。  
ソラ、キツト、そんなこつたらうと思つた、其さまア！サア、またあすこ  
へは入つたり、一人残らず、さうして、モウ一度遣つて見る、ラレは四ツ  
ノ這ひにならずに這入れねへつていふなら、家にお留守居だよ、分  
つたか？  
いよく、眞面目の掛引になつて來升た。ラグルスの面々は、クツクツ笑  
つて居つた聲を止め、後ろの部屋へは入つて、暫らくし出て來た處を見  
ると、一同慈母の權幕に恐おちて、屠所の羊然と、投頭したは、まだしも、一列



に足拍子を揃へて繰り込み升た。ラグルス夫人は遣る瀬なく、  
 いけねへナア、矢ッ張り先よりまだ見つともねへ。丸で珠數繋ぎの徳  
 役人見た様だ。そんな行儀ていは有りアしねへ。モウちつと離れ  
 になつて、さうおつう、誦まらずには入られさうなもんだナ、誰れも、お  
 めへらア捕つて食ふツていやしねへよ。  
 三度目は漸く思ひ通り、成効して、子供等は前の如く、並らんで席に着き  
 升た。さて、ラグルス夫人は一際仔細らしく、

おめへらア、知つてゐるだらうが、見ばの好い帽子が皆んなにヤ行渡ら  
 ねへ、有つた處で、おめへらア、家へ入つてから脱のチ、キツト忘れ  
 る方だから、被せられねへかも知ねへが……なんにしる、好のが引  
 ぱり足ねへんだ。サア、それだから、みんなが、かあやの顔を見て居る。お  
 めへらア丸で、被りツこなしで行な、一人も、それで坐敷へ出て帽子イ

こちらへ、お置なせいッていはれたら、セイラ、おめへ、みんなの代りに、  
 口イきいて、今晚は暖つたかなとも、暖かし、あんまり、近い處だから、邪  
 魔でねへ様に、うちへ置いて來升たツて、さういひナ。よし、か、おべいて居  
 られるか？

ラグルスの面々は茲に至つて、一齊に、

エー、おべいて升。

と驚鳴ると、母親は、少し、ぢれ込み、

おめへらア、知つてゐるとかへ、おめへらにさういハツて、言つてやしね

へよ、セイラにいハツたんだア。

ラグルスの面々は、何れも首を縮め升た。それで、今度は弱い音を出して、

たト

ハイ、ハイ。



といひ升た。

サア、それじやア、みんな立つて、やつて見る……セイラは、はつきり  
ど、口イきムナ。

セイラの舌は、どうやら、口の裏へシツカリくつついてしまつて、一寸  
には物がいへませんかつた。

サア、早く！

かあやがいつたんです……アノ……アノ……あんまり、暖た  
かい帽子だから……アノ近い處を家へ置いて行つた方が好ツて。

どセイラが、死に物狂ひになつて漸く暗誦いたし升た。かふ聞く子供等  
は堪りかね、下住みに抱腹する勢が並らんだ一列の人々を地震と揺り

動かし升た。

慈母は力を落して、溜息をつき、

おめへらア、どうしたら好だらうなア！そんならア、口うつしに、おせ  
いて遣らざばなるめへ。

といつて、一言く、セイラの合點の行くまで教へ升たから遂にセイラ  
はさちほと立をして居て、倒まにでもいへると思ひ升た、

サア、エーニリヤス、おまへ、お客にいつて、何てつて、主人の機嫌を取る  
積りだ？

あれかへ？知らぬへ。

どは青くなつての答へでした。

おめへ、まさか、そけへ、丸太ア轉ろがした様に、人の物ヲ貰つて食ふま  
へに、グーの音も出さずに、グツ座つてたんじやア、濟むめへ？ヤア、ベ  
ードの奥さまに、いつも御機嫌よふごさい升かとか、旦那様の御商買  
は御繁昌ですかとか、かふいふ時候はお躰にどうでござい升とか、な



んどか、いはなくつちや、いかねへ——それじやア、モウお膳に座る段になつた分にしよふ——さふなれば、するどが出来るから、さう諦りのわりいとはねへ。なんのかんの考へたり、鹽梅したりして話しいしてる中が、面倒だ——膝掛イ出したら、セイラから、ビオレまでは、膝の上へ載せるが好い、あとの小なア、胸のところうへ掛けて、首んどけイ挟むが好いぜ、手で摘むじやねへぞ、人の皿のものヲ横どりするなよ。手イ伸ばして、並らべてあるものを引ツたくるなよ、ああんがなせい、つていわれるまで待つてるもんだぜ。そんで、いつまでも食へつていねい、いつつて引ツたくるもんじやねいぞ。お膳の上へ何も蹴すもんじやねへ、……そんなことしたら、奥さまが、追ん出してよこしなざるかも知れぬい、……そんな粗勿したら、追ん出されても仕方がぬい、だぞ。スイザンや、おめへ、ビオレが鼻アかみてい時、借りられる

様に、膝の上へハンクチイ載せておきな。ビオレも鼻液が出た時はうつかりして居ぬいで、さつさと借りて、かまぬいと承知しぬいぞ、……：チヨツ、どふせ、氣のつくこつちや有るめへけど、サア、これから、どんな鹽梅だか、ちつと、稽古して見よふ。クレメントさん、おまへさん、リランベレ、ソースウおあがんなさるか？」

食ふども、なんども！  
クレムは前後の込み合ひで、篤と様子が呑み込めず、此問を平常、うちうちの話しと間違へたのでした。  
クレメントさん、おめへ、お客にいつて、さふいふ言葉アつかうていかへ？、サア、モウ一度、遣り直しイして見な。  
「クレメントさん、リランベレを少しおあがんなさるか？  
へい、ありがどう、そけいらに、ありア、呉れて、おくんささい。



上等だ！そんでも、今夜は遣り直しなんかはねへよ、よし加？」「ピオレさん、白い肉にしませうか、黒い方にしませうか？」  
 色はどつちでも好うござんす、誰アれも食べねへので、あたしは澤山ど。ピオレが様子を造つていひ升た。

それア上出来だ、それより甘かア誰にもいへねへせ、キテさん、おめへさん、菓子へ薄い方の汁ウかけ升か、濃いのにしますか？」  
 薄いか濃い？、ア、兩方少しづつおくんなさいまし。

ど、キテはしなよく、一寸お辭儀をし升た。すると、他の子供たちは馬鹿にして、「ヤァイ〜」といひながら、指をさし升た。ピータアなどは、食しん棒といわぬ計りに態〜ガツついて食べる真似をして見せ升た。

ピータアはそんな真似イしてるな、それアなにも、食しん棒といふ譯じやアねへ、それで何にもわりいことアねへんだ、何でも何をいふッ

ても、いひ様だから、みんな覺えて居る。イーレや、ラレは、寝イするッて、餘り少せいから、兄や姉見ていて、真似イするより外ア仕方がねイ。それからはまだ何かあらうかナ？

ピータアは、少しく鬱悶加減で、  
 かあや、あらア、まだ、モット行儀イをせいるていなら、モウ満腹になつて、食ふ氣がしねへせ、食わねへ中に、行儀計りで、腹が強つちまつたア。  
 コーニリーヤスは、合槌打つて、

あらも、さうだ。  
 慈母は、少しく冷笑の氣味に、

それアお氣の毒様だ、これん計りの行儀で、お困りなすつちやア、よつほどおよるいんだ、それで、セイラは、御馳走が濟んだら、好加減の時分、セイラが立つちやア、モウ歸りませうッて、さういわねへじやいけね



いよ、それで、イ、ヤ、今少しあいでもって言つたら居ても好いが、なんとも  
 いわなければ、歸るんだぞ、よし加、それア呑み込めたか？  
 好加減の時分といふ時分ほど六ヶ敷刻限はないので、セイラもいよいよ  
 よ興をさまし、悲しさうに、

なんだか、あたし、けふの御馳走が頭の上へすつかり、載つかつてる様  
 で、堪らないよ、時分ばかりの行儀なら、まだ好いけど、九人前の行儀イ氣  
 をつけなつていふのなら、あたし、うちに居る方が、よつばど好い。

慈母はなだめて、

いゝさア、心配すんなよ。子供は子供だから仕方がねへって勘忍して  
 呉れる人計りなら好いが、誰がこんな行作ア知らねへ子供ヲ育つた  
 ツていわれると、悪りいからナ——モウ五時に十五分過ぎだから出  
 掛けるが好い——帽子のことヲ忘れんなよ——みんな一時にしや

べるなよ——ス、ザンヤ、ハンケチをピオレに貸て遣んナ——ピ、  
 タアはそんなに胸止イいぢるなよ、見つとむねへ——ヨ、ニリアス  
 はそんなに俯んで居るなよ——セイラはラレを眼イ離さず、見てろ、  
 ラレは姉さんの言ふ通りにするんだぞ、それで、何をすればつて、慈母  
 の里はムツクグリスだツていのを忘れんな。

第六曲

子供等は裏口から徐かに出升て、間もなく見へなくなり升た。セイラは  
 朗讀的に口の中で、今夜は暖いとも暖かし直ぐ近いこつたから帽子は  
 家に置いて來升た今夜は暖いとも暖かし直ぐ近いこつたから帽子は  
 家へ置いて來升たと延つに暗誦して居升たので、足元が留守になり、  
 幾度か滑つたり、躓いたりし升た。



た。他のラグルスの面々は總大將が戸をひいてあちらに行くを見てあひゆると大方ならずでどかたまりになつて協議もしよう存念でしうが、其暇さへ有ませんか。なせといふに二階から聲が有つて、サア直ぐとこちらへお上りなさいよ。といひ升た。子供等は返事をするさへ、其譯を尋ねるさへ其猶豫なく、た言わるゝがまゝに二階へ昇り升て、エルフリダといふばあやに案内されて、臍の緒切て始めて見たといふほど、立派な座敷へ通り升た。嗚呼！これはまた何とせう！セイラ姉さんの影の見へぬうちに、ベードの奥さんが直ぐと。

みなさん帽子は廊下へ置いて來升たか？  
いひ升たが、これ等を運命といはずば、亦何をかそれと申しませうか。ピ  
ィタアは、總領なり、是非口を利かねばなるまいと覺悟し、臆せて舌の自  
由ならぬスィザンが次に立つて居た方を情けなさそうに打見遣り、カ  
ス／＼した聲で、  
けふは暖かいもんだから……それだから……アノ……  
と辛うじていふた。あとをいひ得ず、口籠つて居る處を、スィザンが見兼  
ねて、イザと必死に奮發し、  
ですから見ばの好い帽子が頭敷丈ないんです。  
と思はずいふま敷とを口走り、ハット氣付いてあとは恐ろしさに凍つ  
た物の如く固くなり升た。  
併し幸いベード夫人は何氣なく、



本に、こんな近い處へ帽子は入りません手、わたしはウツカリして  
たのですよ、サア、カロールさんの部屋へ直とおいでなさい、早く逢ひ度  
ッていつて居升たから。

丁度其時セイラが裏梯から登つて來升た。實は密かに料理場を覗いて  
來たので、イソ／＼して居り升た。ピーターは思ひまじさに、捻つても遣  
り度く思ひ升た。さてカロールは悦ばし氣に一同を迎へて居る最中、セイ  
ラは一群の中をキヨロ／＼しながら、

アレ、赤い？、ラレは？、ラレは來なかつたの？  
オヤ、本に、ラレ！どうしたらう？

何でも一處に來たには相違ないのは、スーザンが靴磨の上を踏んだと  
て、叱つた記憶のあるによつても分り升た。ジャックをぢさん抱腹して  
大笑らひをし升た。さうして氣輕さうに、

本當に、おまへさんたちは始めから九人居たのか？

ピオリヤは、泣さうな顔をして耻しげに、

たしか九人でしたッけ、でも、ラレは慥かに居たんです。

ジャックをぢさんは慰めて、

よし／＼安心しておいで、亡くなつたんじやない、どツかに置忘れて

あるに相違ないから、僕が直ぐと行つて見付けて來て上よう。

セイラは其時、

旦那、あたしが行ませう、あたしが世話するところだつたんですから。そ  
れに亡くなつたら御馳走もおいしくは食べられませんか。

他の子供等は突立つたまんま、これが御馳走に來たのか、若しさうなら、  
振舞を悦ば敷との様にいふのは、何の譯かど、何れも苦敷思案をして居  
り升た。



セイラは「ラレヤ！」「ラレヤ！」と呼びつゝ下の廊下をゾット行き升と間合もなく心細さうなビョク／＼聲で、こゝに居たよ！  
答へが有升た實はラレがセイラ姉さんの居なくなつたに付て他の兄姉たちを遣り過ごし振舞といふ恐る敷ものゝ臆の中へ介添なしでは入る勇氣は迎もなく、姉の來るを待つ積りで帽子掛の間へ竄り込み升た。いつまでも來ない所から、匿れ場處から這い出して誰かを呼ぶと升た時、けふは何たる不幸の重なる日か、傘やステッキに遮られて、一歩も先へ出るとが出來ませんかつた。鵝鳴らうとしても、夫はあつかなし、幼な心によく／＼進退谷まつた時、セイラ姉の聲がし升たので、宛がら天人の音楽を聞升た。  
「ヤツクをぢさんは其涙を拭ひ、二階へ連れて行升て、直き大口開いて

笑らふ様にもてなし升た。他の子供等もカロールの親敷扱ひに、一同が實際社會の利者の如くに話して居り升た。カロールの寢床は一番向ふの角へ引寄せて有つて、カロールは眞白なフワ／＼した様な美事な部屋着を纏ふて横になつて居り升た。金色の髪は色白な額と頸の上になつて、と下り、頬は薄すら紅になり、眼は嬉しさで艶／＼して居り升た。さうして子供たちは家へ歸つてから、カロールが畫本の天人ほど美しかつたと話し升た。  
此座敷のあちらの角に大屏風が立廻して有つた其後ろに絶へず混雜が有つた様子でしたが、五時半頃にこれを疊み去ると共に、立派な御馳走が立現われ升た。臺所で松の木の飯臺に向つて、なけなしの食物で間に合せるとも有る貧兒等にとつては實に驚ろく可き見ものでした。丈の高い五色の蠟燭の花やかさ、玻璃器や白銀の器の燦然かなる生花の



香敷卓板の重みて反まで甘味を載せたるなど、總てがラグルスの面々の眼を眩ませ、慈母の氏素性も忘れさせ升て、彼等は思はず、聲を放つて、賞讃し升た。別してラレの舉動などは不躰裁でした。ラレはそれと見る中に、一列の中の我が席から跳び出し、自分のと知れた高い椅子に栗鼠の如くに攀ち登り、卓の上に自分の肥つた腕をかけ、大威勢に、おれが一番に食つて、みんなア負かして遣るから。呼わり升た。カロールは此時涙の出るほど笑らひ升た。さうして席順を指圖して、

をぢさんはこゝへ、セイラさんは、其向ふへ、さうすると丁度双方四人づゝの席が残り升から、

御馳走には七面鳥あり、鶏あり、それに附屬の詰物や汁や、五六種の野菜やら、芹やら、酢漬やら、また一々それを皿へ盛つた鹽梅は得もいわれず、

ラグルスたちには一生の思ひ出になり升た。それは新ら敷ものゝ出る度には是非カロールへ持つて行き度とて、九人のうち誰か一人づゝ、其役に當てられ升た。

第七曲

御馳走が濟み升と、ラグルスの面々にはゆつくりと椅子に憑つて、控へる中、食卓は頓に片づき、さて次の座敷の戸を明け升と、カロールの寐臺と筋違ひなる彼方の隅に眼ばゆき迄蠟燭の火を輝かしたるクリスマス樹が立つて居て、玉蜀黍は雪の如くに枝にかゝり、小さな銀色の風船玉や金箔付の胡桃、其他さまざまの飾りものが美事に生り下つて居り升た。贈物は重にカロールの原稿料で整へたもので、品物の撰擇にはベード夫人が與つて力があつたのでした。女の兒には一人づゝ、淺黄色の頭巾



あり男の兒には頸巻が有升たが、これらば、ベード夫人、カロール、エルフリ  
 ダ三人のものが手づから製したものでした。カロールはみんな買った品  
 では、それほど愛が現はれないからといひ升た。それから女の兒には銘  
 々縞の着物一枚づゝ男の兒には銘々温い羽織一枚づゝ贈られ升た。實  
 用的な贈物は、それらが止めでした。さうして實に過分なものでした。併  
 しカロールは有益なもの、外何か子供の悦ぶ品物を銘々に贈り度とい  
 つて、父に強ひて、自分の貰らふ可きクリスマスへの贈物を辭し、其代りに、  
 ラグルスの子供心を悦ばす可き程のものを充分に仕入れ升た。其相談  
 のあつた時、父は、

さうならば、いくらでも金をおつかひ、カロールが自分のクリスマス  
 みんな人に遺る必要が有るものか、何でも、好ほどお買なさい、  
 と、いひ升と、カロールはソツト、父に近く摺り寄り、

アレおとうさま、それじや、いけませんよ、それでは、あたしのクリスマス  
 スでなくなり升もの、あたしは、こんな何に、何も欲しい物はないに、今年  
 は、シャツクも、ショヨンも、ドナルド兄さんも家に居て、こんな満足なク  
 リスマスは、ないんですから、人に物を與ふるは、受くるよりも、幸な  
 りツて、教へて下さるじや、有ませんか、だから、なぜ、カロールに、さうさせ  
 て下さらないの？ 御自分でも、あたしたちに、何か、下さる時、一番嬉敷  
 御顔なされる癖に、おとうさま、好つて、仰つしやらないと、カロール曲ね升  
 よ。

それじや、ア御意に従ひませう、降参く、  
 おとうさま、何、下さる處だつたの？  
 さうさな、サンタ、クロースの置時計さ、笑ふと、干天かなんぞの様に震  
 れる腹の中に、チャント時計がは入つてるといふ珍ら敷仕かけだか



ら、カロールも見たら堪るまいよ。

カロールは此時笑ひながら、

アレマア、あたしは御飯時に起るではなし、時刻が来たつて改めて床

へは入るではなし、流車の間に合はせるツて急ぐともないんですも

の、古い時計で澤山ですは、

ど、いひ升て、いひ條を通して、決して我儘でないカロールは人形や、書物

時計、大工道具など、毎齡と好みを推し量つて、買ひとのへ升た。主人も

客も實に歡樂を極め升た。併しどの様な結構なことでも、終りは有もの

で、其中、蠟燭は明滅の中に消えつくし、カロールも少し疲れ氣味と見てと

つた母親は、八時半頃に子供を二階から下ろし升た。ベッド夫人はカロ

ルを寝まきに着かへさせ、

サア、カロールやけふはモウこれで、充分ですよ。あしたまた氣分が悪い

といけないから、此通り楽しくしたあとでそれでは残念でせう。

カロールは小聲で、

本當に面白かつたと、始めつから仕まひまで、何もかもみんな

好都合でしたと、子供が一處懸命の悦んだ顔が忘れられませんかよ、

アノ……

母親は心配さうに、

ア、さうだけれど、モウ今夜はお話しもよしにしませう、おまへ草

臥れておいでだから、

かあさま、そんなじやないの。けふは一日心地が本當に好かつたんで

すもの。どこにも痛いところなくつて、キツトけふのと、あたしの爲にな

つたんですよ。

ヒョットしたら、さうなら結構ですよ、八釜敷とや、混雑がなくつて悦



ば敷と計りて、本當に好かつた子、サア戸をべて、おまへ一人静かにし  
 て置いて上るから子、あどで、どうさまと、あたしでソツト様子を見に  
 來升よ、静にして居て、お休みなさい。  
 獨りで居るのは管ひませんけど子、まだ寝くないの、それから、ソテ、あ  
 の音樂聞くんですから子、  
 アノ窓を少し計り開けて、屏風を前へ置いたから子、風の當らない様  
 に、  
 外の戸を少し開けて、寢床を少し斜にして置いて頂戴よ、今朝は早く  
 眼が覺めて、アノ東の窓に美しい星が一ツ輝いて居升たもの、始めて氣  
 がついたもんだから子、アノ博士が救主を尋ねに來た時の星のと思  
 ひ出し升たよ、かあさま、御機嫌よう、嬉しい〜日でしたよ、  
 カロルは再び母を呼止め、

かあさま、一寸こゝへ耳貸して頂戴、かあさま、けふのクリスマスは、神  
 様が悦んで下さる様ツに守れ升た子、子、かあさま？  
 ベード夫人は優しく、  
 本にさうですよ、

\* \* \* \* \*  
 \* \* \* \* \*  
 \* \* \* \* \*  
 \* \* \* \* \*  
 \* \* \* \* \*

ラグルスの子供等は、ボール、ヒューなどの若手と散々戯れ遊び升て、遂  
 にシャツクをおさんか送つて家へ歸した時には、ラグルスの女房さん  
 もイキセキと悦んで顔を眞赤にして居升た。キテとリレムが慈母にと  
 つて置いた密柑を見せ升たらば、慈母が、ベード夫人が六時頃に、生れて  
 始めて見たといふ程結構なお膳を下さつたといふと、一ヤル一弗位も  
 しさふに思へる反物を下さつたといつたのには、子供たちも大きに驚



ろき升た。

マヤツクをぢさんは女房さんと暫らく話し、歸らふとして、子供等が貰つた品々を慈母に幾度となく見せて居る所を看、又一方には、其悦びの源になつて居るカロールが寢に就た部屋の窓を仰ぎつゝ、幼兒が彼等を導くべしといふ一句を思ひつき升た。ア、あの兒に若し……萬一のとあらば、其時こそ、幼兒の意志を繼いで、子實に富む此家族の爲には一肩入れよふと人知れず心に誓ひ、さて家に歸れば甥たちが、

をぢさん靜に……教會の音楽を聞いている處ですから、さつきCarol, Brothers, Carol と云ふのを歌つてしまひ升たから、これから、カロールの注文した My ain Cantrie にかゝる處でせうよ。

ヘード夫人は

カロールが聞いて居て呉れれば好いが、今夜はいつもよりか晚いし、寢て

居るかと思へば、尋ねもされませんから、モウちつつつけ十時でせう。獨吟者なる男兒は白いサアリスをつけて、高樓に立ち、黄金髪の冠したる其頭は、晃々たる光に相映じ、嚴肅なる色白き顔は、一層の青味を帯び升た。心に訴へたのは、音聲の澄渡る麗しさか、將歌の言葉の美敷爲か、教會堂にも隣りなる彼の家の中にも、幾多の眼は打濕り升た。

我家はどほく

我倦みはてぬ

はや迎へ玉へ

父の御もとに

慈悲の御かほ

あまつ御かど

此眼に見ほし

我が行く國に

色香めで度き

世は花さかる



鳥のこえすら  
 清けくきこゆ  
 など劣らまし  
 聖者のたゝへ  
 聞まほしきよ  
 我が行く國に

赤兒ははゝに  
 離どりは巢に  
 我もよりたや  
 父の御むねに  
 抱きたまわめ  
 甲斐なき身をも  
 導きたまわめ  
 父の御くに

幾多の眼に涙を湛へ升たが、カロールの眼には一滴も有ませんかつた愛情優しき其心は靜かに動悸を止め、いたいけの雛鳥は古郷の巢に歸り升た。カロールは遂に永き眠りにつき升た！併し、兼て聞度と執心した其

歌は或は耳にしたかも知れませんが、どちらとも申されません。

賑は敷かつた日の終りは實に悲惨でした。が、それは世に遺された人の上計りです。併し悲嘆の眞最中にも、カロールの母は最愛の兒が、けふこそはと思ふほど實に心一杯の喜びと満足を感じた。此世を辭して、永遠の平和に移つたことを切めても心癒せに致し升た。母はカロールが世を去る時も世に初めて出た時と同然、世界舉つて滿腔の悦びを湛ふる其日、いわひ歌の翼に乗つて行き、殊に世を終ふる日には人の悦ぶと共に悦び、人の樂しみ笑ふを見て、共に樂しみ思ひにも、言葉にも行ひにも、我身を忘れて、人を愛する愛に原づかなかつたものは無いといふ一事を何よりも嬉しく感じ升た。庭の後ろなる小さな家にも、非常な悲しみが有升た。或日セイラは思ひ



追つて平常の憶面はどこやらへ暫らく失なひ帽子を冠り、シャウルを着て半道もあるカロルの醫者の診察場へ行き突然、

旦那、お嬢さんの御馳走に行つたのは、あたしと、うちの子供なんです、  
そんで、あたしたちの所爲で悪くなんなすつたのなら、逆も一生嬉  
敷顔は出来ません！

と泣顔になつて訴へ升と、深切なる老醫は、セイラのひいだらけな手を  
探つて泣くには及ばない嬢さまの臨終は決して、おまへたちが早めた  
のではない、弱り果てた心に、人の上を思ふ熱心な希望がなかつたなら、  
其クリスマスを守るも待たず、遠く永眠したので有つたらうと申され  
升た。

幾多の懷舊を擔ふた歲月は代る／＼に過ぎ行き、美敷希望を胎る年は  
新たに生れ出で、古きを繼ぎ升併しカロルの靈は嬉しき音づれつぐ

る、クリスマススの鐘の聲、幼き人の歌、ふいわひ歌の悦ば敷音に、幾久しく  
生命をたもつとと信じ升。



い  
わ  
ひ  
歌  
(終)



明治二十七年十二月拾日印刷  
明治二十七年十二月十三日發行

定價金拾錢  
郵稅金貳錢

譯者 若松 賤子

發行者 東京市京橋區出雲町壹番地 福永文之助

印刷者 東京市京橋區西紺屋町廿六番地 高田乙三

發行所 東京市京橋區出雲町壹番地 警醒社書店

賣捌 東京市神田表神保町六番地 好明館

賣捌 大坂市西區土佐堀三丁目 福音社





皇后宮陛下 御覽濟の書

小公子

一冊廿八錢

郵税入錢

譯者の序に曰く、母と共に野外に遺棄する幼な兒が、幹のくねり尋常ならぬ一本の立木に指さして、あさま、あの木は小さい時誰かに踏れたのです、と申しました。考へて見ますと、美事に發育すべきものを遮り、素直に生ひ立つ筈のものをくねらせるほど、無情なるは實に稀で御座り。邪道に陥らふとする父の足をさぐり、卑風に流れ行く母の心に高潔の徳を思ひ起させるは、神聖なる天職を擔ふ可愛の幼兒に限りませぬ。私は深く幼子を愛し其恩を思ふ者ゆへ、此珍重すべきまろツツを尙一層優待したいと切に願ふ者です。斯る主意にて譯成る。原著は此頃英米に轟ろき渡り、子供の讀物として愛々しき事深よき事の類ひ無きは更に言はず、白髮の老者も、心願なる人も、之を讀める間は天使に接する如しとて、推賞大方ならず、改版十數回、且尙は劇に演じて非常の喝采を博しぬ。譯者は斯る原文の味を損せしめて辛苦せられ、紙數二百八十頁、密綴十四箇入の大本として、今日世に進め玉へり。

音學師納所辨次郎君編

クリスマス讃美歌

定價金三錢 郵税五册迄二錢  
五十册以上御注文の方へは無  
遞送料

譜附定價十錢 郵税二錢

我國未だクリスマスマスの唱歌集なし本書は大和建樹、磯貝由太郎、奥野昌綱、湯谷瑛一、戸川安宅、池亨吉等諸先生の聖誕節に關する讚美歌を編纂したるものなり一は譜入にて教師用のためにし一は普通用とし兩様に出版せり聖誕節將近に近かんすと諸教會及び日曜學校より多數の御注文を待つ

東京市出雲町壹番地

發兌 警醒社書店



